

セッション4

1. 上腕二頭筋 : Biceps branci

起始:

(長頭) 肩甲骨関節上結節、上方関節唇

(短頭) 肩甲骨烏口突起

停止:

橈骨粗面、前腕屈筋腱膜

メモ: 上腕二頭筋長頭腱は結節間溝を通過後、関節内に入る。

関節内に入った長頭腱は、烏口上腕靭帯の下方で棘上筋と肩甲下筋の間を走行し、関節上結節と上方関節唇に付着する。

上腕二頭筋の短頭は烏口腕筋と合流し、共同腱として烏口突起に付着する。

神経:

筋皮神経(C5.C6)

作用:

肘関節屈曲

前腕回外

肩関節下垂時-肩関節屈曲(主に長頭)

肩関節 90° の時水平内転(主に短頭)

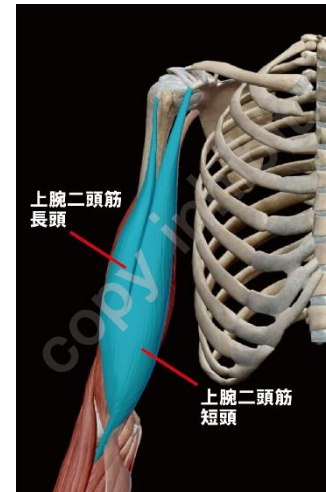
メモ: 上腕二頭筋の長頭は上方関節唇を持ち上げることで骨頭の上方移動を抑え、関節上腕関節の安定化に寄与している。

上腕二頭筋長頭は結節間溝を滑走し、特に外旋位での緊張が増加する。この腱の緊張は骨頭の求心性を高め、関節上腕関節の安定化に寄与している。

前腕の回外には上腕二頭筋と回外筋が関与するが、肘関節屈曲位では上腕二頭筋は弛緩し、このときの回外は主に回外筋より行われる。

疾患:

上腕二頭筋長頭腱炎



肩上方関節唇損傷

上腕二頭筋長頭腱断裂

上腕二頭筋長頭腱脱臼

理学テスト:

ヤーガソンテスト

肘関節を 90° 屈曲肘位で検者は患者と握手をするように手を握り、前腕を回外するように指示する。この時、検者は回内方向へ抵抗を加える。結節間溝部に痛みがあれば上腕二頭筋長頭腱炎を疑う。



スピードテスト

上肢下垂、肘関節伸展、前腕回外位にしておく。肩関節を屈曲させるように指示する。検者は前腕遠位部をつかみ、肩関節屈曲に対し抵抗を加える。結節間溝部に痛みがあれば上腕二頭筋長頭腱炎を疑う。

触診:

(長頭)被検者を背臥位とし、肘関節を 90° 屈曲した肢位が開始肢位となる。被検者には前腕の回外運動を強く反復させ、上腕に膨隆する筋腹の外側に指を当てる。収縮を近位へ迫っていくと、長頭腱が結節間溝を通過する様子が触診できる。(短頭)前腕の回外運動に伴う筋の膨隆を内側より追っていくと、上腕二頭筋短頭が触診できる。近位では、大胸筋の下に潜り込みながら烏口突起へ向かう短頭腱を触診していく。

刺入:

長頭腱走行に沿って直刺か斜刺で刺入する。
筋腹最も膨らんでいる筋腹中央に矢状方向に刺入する。

確認方法:

結節間溝部と上腕二頭筋腱部を触り、その部で攣縮していること。

* 電流量を上げると前腕の回外運動がみられる。

